スウェーデンにおける高齢者施設と香りのアートについて

岩　﨑　陽　子・杉　原　百合子*

はじめに

嵯峨美術大学・短期大学のメンバー４人（岩﨑陽子、松本泰章、坂田岳彦、真板昭夫）は他大学や研究機関と連携しながら、香りを使ったアート・デザインにより高齢者にとって居心地の良い空間を創出するための、科研費による共同研究「『懐かしい匂い』と創造活動による認知症の人の安心できる居場所作りとその効果検証」を2016年８月より開始した。

「匂い」は生活環境の快適さを左右する最も重要な因子の一つである。匂いが快・不快の感情、過去の記憶を呼び起こすことは周知のとおりであり、動物実験においても、嗅覚処理に関わる脳内部位と情動処理に関わる部位の間に神経投射があり、本能・情動に影響を与える感覚機能であることが明らかにされている。また認知機能に低下がみられても、香りは高齢者の感情や気分により直接的に作用を及ぼすことが期待され、QOL向上に有効なツールとなる可能性がある。

しかしながら、匂いや香りは他の感覚における環境要因に比べ、高齢者のケアの場面における影響を積極的に研究されてきたとは言い難い。環境工学などの分野から臭気そのものの測定などの調査はいくつかみられるものの、香気または臭気が高齢者や介護者に及ぼす影響、特にQOLとの関連といった視点からの研究がほとんど見当たらない。

また本研究によって、高齢者だけではなく、介護者や施設職員のQOL向上にも効果が期待できると考えられる。施設内の高齢者の介護・看護における、排せつ物臭、加齢臭のにおいの問題も大きい。これは入所者だけではなく、介護者・医療従事者に対するストレスの原因となっている。本研究はこれらの介護者・医療従事者への快適な生活、より積極的には単なる消臭を越えてアートやデザインによって生み出される「創造的な空間」の提案も結果としても予想できるのである。

こうした問題意識から出発した当研究において、高齢者の看護や介護の先進国であるスウェーデンは非常に気になる国であった。文献渉猟を行っても、福祉や医療のシステムについての先行研究は多々見られるが、高齢者施設における匂いの問題の処理の仕方や、アロマや香りを使ったアートなどが高齢者施設でどのような役割を果たしているのかは、日本国内にある文献からはほとんど読み取ることができなかった。

したがって、研究メンバーのうち杉原百合子（同志社女子大学看護学科）と岩﨑陽子の二人が2017年８月15日－21日まで実際にスウェーデンを訪れ、高齢者施設を視察して介護関係者に話を聞くことにした。また香りのアートの展覧会をスウェーデンで行う可能性について、現地の学芸員やアーティストと討議した。彼らとはスウェーデンにおける匂いの位置づけやアート制作の方法について話し合うことができ、全体として研究進展への寄与は大きいものであった。本稿はその報告書である。

*杉原百合子・・・同志社女子大学

高齢者施設訪問

今回訪れたのはスウェーデン首都ストックホルムから電車で６時間ほど南にかなり下がった（むしろコペンハーゲンから２時間ちょっとと近い）ところにある、Östra Göinge市のKnislingeという町の介護施設である。

これは市営の標準的な施設である。（スウェーデンでは市営の高齢者施設が大半で、私立のものは少ないと聞いた。）

この土地で視察を行った理由は、高齢者施設への仲介をお願いした現地在住のアーティスト・小山泰史さんがここに生活拠点を置いていたからである。彼は施設のスタッフと親しい友人関係にあり、彼と一緒に行けば私どもも気兼ねない環境で話が聞けるという利点があった。

訪問日時は2017年８月17日午後15：30より１時間程度であった。当日施設を訪れると、専任部長（Enhetschef）のCecillia Werdenfelsさんと当施設で働く看護師Wenyun Svenssonさんが出迎えてくださり、和やかに視察が始まった。最初に地元市役所の広報の方が記念撮影を要請され、先進国（と向こうからは思われているらしい）日本からの視察ということで、相手もこの視察を歓待してくださっている雰囲気を感じ取った。

新施設建設中―ランドリーと庭園

話し合いは、2020年に完成予定の新施設の構想から始まった。現施設は現在工事中の向かい側の空き地にある新施設へと生まれ変わる予定だということで、Cecilliaさんは新施設の模型や建物の配置図などを見せながら熱心に説明をしてくださった。

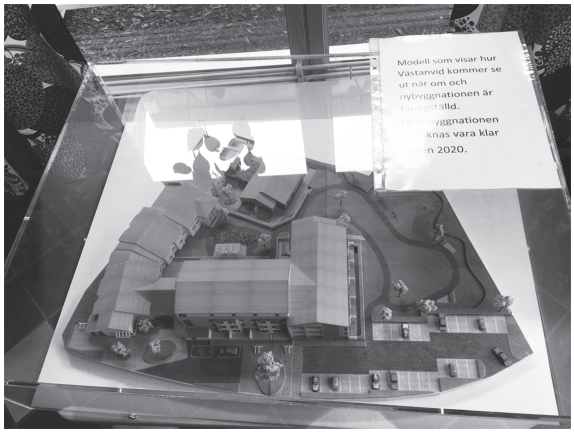
新施設は現在の施設の不便な点を改善すべく、起き上がりリフトの標準埋め込み装備や各居室単位での洗濯が可能になるランドリーの設置などが予定されているという。また、施設に付属して大きな庭園が造成され、地元の人々にとって慣れ親しんだ四季折々の樹々や花などが植栽されて、住人が散歩や窓辺からの風景を楽しめるようになっているとこのことであった。

新施設建設ということは、現在の施設の問題点が職員や住人にとって鮮明に意識され、それを改善すべく新しい施設での実現可能性が探られている時期であることを意味している。これは視察にとって非常に有効であった。

例えば、上記の各個室に新設予定のランドリーの話は（予想外であったが）人間の日常生活と香りのあり方について一考する重要な契機を含んでいる。機能面からだけいえば、高性能な洗濯機と乾燥機を具えた大きなランドリー室が共用で１室あれば十分に思えるかもしれない。しかし食事と並んで高齢者のQOLに関わるのは本人の身だしなみの意識であろう。当施設ではベッドに横になっている高齢者の方も綺麗なドレスを着てアクセサリーを付け、手足の指のケアを欠かさない（ちょうど私たちが視察している最中も、フットケアを気持ちよさそうに受けておられる入居者の様子が印象的であった）。

洗濯機が自室にあるということは、洗濯時の洗剤の香りや、洗いあがったものを干す時の匂いが元気なころの自宅での生活の一環をしのばせることになるであろう。またプライバシーの問題も解決できる。各部屋にランドリーを具えることを新施設で決定したということは、スウェーデンでの細やかな介護の在り方の一端を見るようであった。

同様のことは庭園の樹々の植栽予定についても言える。日本でも介護施設と幼稚園や保育園が併設されて高齢者が子どもを見て和む機会が提供されている実例は聞く。当施設も現在は大きな公園に面しており、遊びに来る子どもたちを施設から眺めたり声を聴いたりすることはできていた。



そこでの樹々の選定には、四季の花の香りなどが重視されていると言われていたことから、高齢者がこれまで送ってきた住環境における匂いのあり方が庭園によって再現されようとしているように思えた。

このように新施設で実現されようとしている新しい試みの中に、高齢者と匂いの記憶についての重要なポイントがいくつかあるように思われた。

現在の施設状況と匂いの問題

現在の入居者は25人。それに対する看護師を含めた介護スタッフは25名。スタッフはシフトを組んで入居者のケアを行う。入居者の年齢内訳は具体的には聞かなかったが、視察中に100才を越えるおばあちゃんにお会いした（彼女はとても元気で椅子に座り、私どもににこやかに挨拶をしてくださった）。男性は少ないようであったが、視察中に１人はお見かけした。

施設に入る基準については、日本と同じように家族や本人が自宅での生活に困難を感じた時に市に連絡し、本人の生活能力を視察してもらい、必要な場合は施設への入居が決まる。当施設では月14万円の支払いが生じるが、もし高齢者に支払い能力がなくても、市が補助し、貧富の差なく高齢者は施設に入れる。今回視察した施設には順番待ちの人が何人もいると地元の人が教えてくれた。しかし、それでも長くても３ヶ月の待機時間と法律に定められている。

施設内の具体的な案内は先のCecilliaさんに加えて看護師Wenyunさんが来て熱心に話してくださった。

入居者の方々の居室内も見せていただいたが、驚くほど広く（日本の畳の間なら10畳はある）、各室に広い（６畳ほどある）リフト付のトイレとシャワー室と、２畳ほどのウォークインクローゼットが備えられている。トイレは清潔で各人がリフトを使って自分で使用できるようになっていた。クローゼットには自分の服がたくさんかけられており、着替えもしょっちゅうするようで、入居者の人の着ておられる服は非常に清潔であった。

また室内における施設のものはベッドと棚くらいであり、あとは各入居者が自宅から持ち込んだ家具や装飾品で飾られていた。もちろんすべての家具を持ってくるのは不可能であったろうが、綺麗なガラスボードなどに思い出の品々や近親者の写真、手作りの手芸品などが飾られて、各入居者の個性が室内のしつらいにも感じられた。

食事のためには共用の広いダイニングがあり、そこに時間になるとドレスアップして入居者が揃うとのことであった。また、クリスマスなどの行事を祝う大きな宴会場のような場所も別にあり、ハレとケの空間がきちんと区切られているのも印象的であった。居室内にも小さなキッチンがついており、入居者は自分で簡単な自炊は可能である。また、入居者全体のための調理を行う炊事場にも、希望次第で調理に（じゃがいもの皮むきなど）参加をすることもできるとのことで、入居者の食事に対するこだわりに沿う気持ちが感じ取られた。

また何よりも印象的であったのは、いわゆる介護施設にありがちなトイレ関係や食事のこもった匂いがどこにもしない、という点であった。これはトイレが各居室に備えられており、ほとんどの人がリフトを使用して自力排泄を行っていることと、身体や衣服がとても綺麗に手入れされていることに由来する。また食事の空間と居室が離れているのも、入居者が匂いを感じないで暮らせる空間となっている要因であると思われる。

このように、この施設では日本で問題となっているような、臭気としての匂いの問題をほとんど感じることがなかった。感動している私たちを見て、Wenyunさんもむしろ日本の共同トイレやトイレと食事空間について質問をされ、日本ではそれらがむしろ機能性を重視して近くに配置されているという話を驚いて聞いておられた。とはいえ、私どもがスウェーデンで見た当施設の設備や空間が特別良いというわけでもないとのことで、この国の介護では標準的な方であるとのことであった。

２つの匂いの問題

「高齢者、匂い、記憶、アート・デザイン」というキーワードで学際研究を行っている私たちであるが、この研究には２つの側面がある。

１　先に述べたような高齢者施設における排泄物や体臭の臭気の問題の解決による、高齢者自身と介護スタッフのQOLの向上

２　アートやデザインによってもたらされる匂いによって喚起された記憶が寄与する高齢者の精神的な生活の向上

日本では特に１の方が介護や看護の現場では問題視され、その解決策として各施設では消臭スプレーやアロマ付空気清浄機、ハイパワーの換気システムなどで対応している。しかし私ども研究メンバーとしてはそのような画一的でまさに「臭いものに蓋」をするような策ではなく、匂いや香りのもつ潜在力を引き出して、高齢者の生活を豊かにすることができないかと考えてきた。

この問題意識が２につながる。特に匂いと記憶の結びつきは強く、高齢者にとって匂いによって記憶を呼び覚ますことは自身の精神生活の活性化をもたらす可能性がある。その喚起の方法を、アートやデザインの力で高齢者自身の働きかけも含めてクリエイティブに提供できないかという試みを探るのが１につながりつつも独自に視点をもつ２の研究目的である。

しかし今回の視察によれば、スウェーデンの高齢者施設では１の問題は既に解決済み（ほぼ問題なし）であり、それは施設内の居室の大きさやスタッフの余裕のある丁寧な介護による力が大きいことが見てとれた（40代に見える看護師のWenyunさんに失礼ながら給料について尋ねたところ、手取りで25－30万円程度（休日出勤手当込で平均より多め）とのことであり、日本での正看護師のような上級資格を持っていればそれに加えて10万円はもらっているだろうとのこと。この方と同年齢の日本で働く看護師にも給料を聞いてみたが、スウェーデンの給料の方が断然良いということであった。そしてこうした余裕が丁寧な看護や介護に直接的に結びつく可能性は高い）。これを可能にするシステムのあり方については匂いに注目するだけではなく、社会福祉システムなどのまた別の観点から広く検討すべきであろうし、多くの先行研究がこれを行っている。

よって本研究では２のアートやデザインによってもたらされる匂いで喚起される記憶とそれによるQOL向上について、その構造と可能性をスウェーデンでも探ることができるかを、現地の美術館の学芸員やアーティストと話し合う必要性があった。

スウェーデンにおける香りアートの展覧会

2017年８月17日午前、前日に空港利用したデンマーク・コペンハーゲンからスウェーデン内に移動した私たちは、Kristianstad郊外でKristianstad県立美術館学芸員Evelyn ThomassonとLandskrona県立美術館学芸員Janne Jonssonに小山泰史さんのご紹介でお会いし、ミーティングを行った。

ここでの目的は、今年2017年７月に京都で開催した香りのアートの展覧会「Petite Balade　時の散歩」（当展覧会については、本紀要133頁の詳細参照）の巡回展を、10月に予定されているParisに引き続き、ここスウェーデンでも実施できないかという相談であった。

この展覧会は単なるアートの展示だけではなく、鑑賞者に対して心地よさやなつかしさの喚起について問うアンケートを同時に実施するアートと研究の複合形態をとっている。Parisでもほぼ同じ展示とアンケートを行う予定であり、福祉国家のスウェーデンでもこのような高齢者の住空間の快適化を最終的に目指すような研究と展示をできれば、当研究の進展も予測されると考えてのことであった。

２人の学芸員は私たちの研究構想と７月の展覧会に非常に興味を持ってくださり、特にEvelynさんは同僚に高齢者とアートというテーマで企画展やワークショップを行っている学芸員がいるので紹介してくださると言っておられ、やはり高齢者福祉が充実したスウェーデンではアートでもそうした視点が入っているのだと感じた。

その場で展示会場と時期についていくつかのアドバイスを頂き、実現するかは未定ながらも私たちはKristianstad県立美術館の姉妹美術館である、近郊のÅhus美術館の視察にも急遽行った。展覧会開催がどこになるにせよ、Evelynさんのご助力で、来年2018年に私どもの香りのアートの巡回展は実現の運びとなった。これも今回のスウェーデン訪問の大きな成果であるといえよう。

スウェーデンでの展覧会が実現するとなると、これまでの日英仏のアーティストだけではなく、スウェーデンのアーティストも加えて作品展示を行う必要がある。現地を案内してくださった小山さんには香りと石彫を組み合わせた作品が既にあり、香りと当研究にとても興味を持ってくださっていた。

彼のご紹介で、翌日８月18日にはGöteborg（ヨーテボリ）に車で４時間ほどかけて移動し、現地で美術家Åsa Herrgårdと舞踏家Carmen Olssonに面会した。彼女たちは個人としても活動しているが、ユニットでも過去にいくつか作品を発表しており、今回も個人か共同制作になるかは未定だということであった。興味深かったのは、彼女たちが「香りのアート」と聞いて思いつくスウェーデンの香りの素材を持ってきてくれたことであった。それらは瓶に詰められた海の塩水と海藻、砂浜の砂といったものであり、蓋を開けて匂いを嗅ぐと、まさに子どもの頃の海水浴の時の匂いがした。彼女たちが住むヨーテボリから１時間半ほどのBottnaフィヨルドにあるGerlesborgは海辺の小さな町であるが、森と海に恵まれた大変美しいところで、この小さな地域に100人を超えるアーティストが住み、活動しているという。海の匂いを瓶に詰めて持参してくれたのはまさに彼女たちの住環境を匂いによって運んでくれたのであった。またそれだけではなく、スウェーデンでは各家の門の前にリンゴやナシの樹を植えるらしく、ちょうど今の時期にそれらが実を結んで住人に良い匂いと美味を提供してくれるとのこと。私たちのために紙袋の中に無造作に詰められた野生の青リンゴは、実が小さくお世辞にも綺麗な色と形をしていなかったが、香り高くて歯を立てると甘酸っぱい果汁が口いっぱいに広がった。これもまた彼女たちの日常生活を香りで説明する大変的確な自己紹介であっただろう。（これに対して日本からは私たちが持参した香りのお土産は衣服に忍ばせる匂い袋であった。100％自然物を使いながらもかなり洗練された匂いの文化的背景をもつ匂い袋。自然を貴ぶスウェーデンとの共通性と異なる点が際立って興味深いものであった。）

また彼女たちはヨーテボリの町を案内して、特に私たちの興味を引きそうな、特別な匂いのする食べ物の屋台や植物園、運河沿いなどを見せて（嗅がせて）くださった。彼女たちはこうしたことから、既に香りのアートの肝を抑えているようで、やはり自然の中で暮らしているスウェーデン人たちと、四季の事象を大切にする私たち日本人とはある種の共通点があるのではないかと強く感じた。

彼女たちがユニットで行った過去の作品も、図らずも香りや匂いを重要なマテリアルに据えるものが多く、小麦粉や蜜蝋、廃屋など、物質や環境から発する匂いを使いながら作品制作を行ってきたことが伺えた。また「なつかしい」（スウェーデン語ではvemod）という感情についても討論したが、フランスやイギリスで話し合った時とは異なり、かなり日本に近い感情であるように思われた。「なつかしい」ということは単純な懐古主義や後ろ向きの思想ではなく、辛かった過去も含めて前向きな気分になる、というものであった。

このように、プロジェクトに参加してくださるスウェーデン側のアーティストも現地在住の日本人、スウェーデン人ともに適任が今回のスウェーデン訪問で見つかり、ホッとした。皆さんと来年の展覧会での再会を約して別れたのであった。

むすびにかえて

当研究は学際研究であり、アートやデザインのあり方だけではなく、高齢者の環境整備も重要な研究目的である。その意味では今回のスウェーデン訪問は高齢者福祉の先端モデルを目の当たりに、日本での問題点と改善の可能性、また匂いや香りのもたらす無限の可能性について、現地の高齢者施設のスタッフ、美術館関係者、アーティストたちとじっくりと話し合う好機であった。また単なる視察ではなく、高齢者施設にせよ、美術館での展覧会にせよ、次回の試みとつながるように多くの人に興味を持っていただき、研究への参加を約束していただいた。

スウェーデンは私どもの研究を、特に高齢者施設の問題から繙くのに重要な国になることは間違いない。今回の視察の成果をきちんと形にして研究成果として残したいと強く思った。

※なお、この研究はJSPS科研費25560018の助成を受けて実施された。

●壁のタペストリー、小物掛け、カーテン、人形、すべてAさんの自作。

●Bさんは自力では起き上がれないので、補助具をつけた状態で移動。

●壁のタペストリーは全てCさんの自作。　100歳のお祝いに、王様からもらった電報。
自室で食事。お着替えの衣装も豊富。

●自室の補助器具付トイレ

●自室付の台所

●食堂

※以上の施設写真は現地在住のアーティスト・小山泰史様撮影による。小山様、撮影に応じてくださった皆様に感謝申し上げます。